

基本方針

t r a n s m i s s i o n ～知ることからはじまる  
e x p e r i e n c e ～来てみて触って気づく  
s e t t l e m e n t ～はなれたくないまち、帰ってきたいまち  
c a r e f u l ～心身ともに安心するまち  
b o n d s ～仲間の絆を深め、輪を広げていく  
i n c r e a s e ～多くの同志を求めて

スローガン

L I V A B L E ☆

～住みよい 魅力ある 誇れるまちへ～

## 所 信

2016年度 公益社団法人呉青年会議所  
第64代 理事長 神 垣 良 子

私は呉のまちが好きだ。

海軍と共に歩んできた古い歴史。モノづくりが盛んな人工的な面がある反面、癒しの滝や穏やかな海に連なる島々などの美しい景色も豊富にあり、美味しい海の幸、山の幸もたくさんある。気候的にもとても住みよいまちだ。遊びに来た県外の友人に、「良いところだね」と褒められると誇らしい気持ちになり、さらに呉のまちが好きになる。

もっと多くの人に呉を知ってもらい、来て感じてもらいたい。そして、呉のまちのファンを増やしていきたいと思うのだ。

### t r a n s m i s s i o n ～知ることからはじまる

各地のPR方法を見ると、とてもおもしろい。

キャラクターを使ったPR。動画を使ったPR。自治体の長が自ら行うPR。まずは注目し、知ってもらい、どんな魅力があるのか目にしてもらうために手法をこらしている。発想がすばらしく斬新だ。そうしたものは関心をもたれやすく、自然に拡散されていくものである。

興味をもってもらうきっかけは何であってもよい。

呉市としても市内を飛び出して県外でのPRを行うなど、広報活動に力を入れている。そうした中で、より多くの人たちに呉のことを知ってもらうためには、さらに効果的な方法を模索し、情報提供の場をいかに広げるかが重要になってくるのではないだろうか。

情報を得やすいと感じるもの、記憶に残るものには、視覚的にそそられるもの、想像を膨らませワクワクさせてくれるものがある。文字ばかりの情報ではなく、五感に訴えられるものは比較的印象に残りやすいと思う。わかりやすくシンプルに、深く心に残るものを、どのような方法で、どのような媒体を使えば目にしてもらえるのか。今一度しっかりと考えてみる必要がある。

情報は知ってもらわなければ意味がない。どれだけ多くの人に知ってもらえるかが、最初の重要なポイントである。県内、日本、世界と、呉のことをいまだ知らない人たちがまだまだたくさんいる。知らなければ選択肢の一つにも入らない。市外からも注目されるような広報を通し、まずは少しでも呉のことを知ってもらいたいと思う。そうした活動を行う中で、それは自然と呉青年会議所のPRにもつながってくるはずである。

### e x p e r i e n c e ～来てみて触って気づく

今、呉のまちは、生死による自然増減の人口減少だけでなく、転出などによる社会増減の

人口減少が生じている。それに伴い、まちの経済が衰退しつつある。そこで、まちの経済を復活させる手段のひとつとして、観光業があると考え。観光により、多くの人が呉に溢れば、地域衰退の歯止めのひとつになると考える。

2005年に開館した大和ミュージアム。2015年には来場者数が1000万人を突破した。呉の観光業の主軸となる素晴らしい施設である。しかし、多くの人たちが大和ミュージアムに立ち寄った後、市外へ流れていく。ここまで足を運んでいるのにも関わらず、とどまることなく離れていくのは、なんともったいないことだろうか。やはり市内を周遊でき、滞在して呉のまちを堪能したいと思わせるほどのものが必要だと思う。滞在型観光の振興こそが観光都市としての成功につながるのである。

現在すでに行政においても、観光に対する様々な取り組みがなされている。美しい景色や古い歴史、呉ならではのグルメといった既存の魅力を集約した「呉の魅力・お宝90選」の発行。海上自衛隊の協力による各店舗における海自カレーの提供などである。各地各団体と協力しあいながら、魅力の再確認や新しい形での魅力の発掘がなされている。話題性のあるもので目を惹きつけ、既存の魅力にも触れてもらう。とても効果的な方法であると思う。

既存の魅力に注目してもらうためにも、関心をもってもらえるような時代の流れに沿った新しい魅力をさらに生み出し、宿泊につながる仕組みを考えていかなければならない。新しい魅力をきっかけに呉のまちに足を運んでもらい、滞在してもらう中で既存の多くの魅力にも触れてもらいたいと思っている。

来てもらった観光客に「来て良かった」「また来たい」と思ってもらえれば、リピーターとなり、またさらに人を連れてくる。そうなれば、市民にも地元を誇りを持ち、さらに好きになってもらえると思う。このサイクルが続いていけば、市民にも市外の人にも注目してもらえるまちになっていくのである。

## settlement ～はなれたくないまち、帰ってきたいまち

さきほども述べたが、人口減少はとても大きな問題だ。特に若者の市外流出は年間800人にもものぼる。これからを担っていく若い力の喪失が地域の衰退にさらに拍車をかけているように思う。その問題を観光業で補うだけでなく、やはり呉のまちに若い力がとどまり、地域の力になっていくことが一番である。呉に住んでいるのは、なぜなのか。私がこのまちに住む理由は、冒頭にも書いたとおり呉のまちが住みよく大好きだから。

私は、大学時代を東京で過ごした。ただただ都会に憧れをもち上京した。しかしその都会の生活の中で、山と海に囲まれ人との距離を近く感じられる地元での生活を懐かしく思うようになった。長期休暇に実家に帰ると安らぎを感じ、下宿先へ戻りたくなくなる自分がいた。呉に帰り15年以上経つが、これからもこのまちに住み続けていきたいと思っている。

理由は人それぞれであると思うが、呉に生まれ育ってきたからには、この地にとどまってほしいと思う。そのためには、市外の人だけでなく市民の人にとっても魅力的なまちであ

る必要がある。

市外へと人が流出する理由のひとつに雇用問題がある。行政もここに力をいれた取り組みを続けている。そうした中で、働き場所の確保をするとともに住みよいまちであることもとても大切である。住みよいまちとは何であるか。それはやはり子どもがのびのびと夢をもって楽しく暮らせるまちであることであると思う。進学による人口流出も大きな問題としてあるが、親はもちろん、子どもにとっても楽しいイメージで過ごした大好きなまちであれば、このまちにとどまり、例え一度はこのまちから離れたとしても、きっと帰ってきたいと思うはずだ。呉のまちが好きならば、自然とその人たちは定住していくものだと思う。

子どもが笑顔で楽しく住めるまちとしてのブランド力が上がれば、市外へと出た人も、また市外の人でも呉に住みたいと思いついてきてくれるものと信じている。

### **c a r e f u l** ～心身ともに安心するまち

2001年に起きた芸予地震以降、呉のまちでは大きな災害はない。気候は比較的穏やかで、台風や雨などによる被害というものはそう多くはない。呉のまちには安心して住めるとも良いところだと思う。しかしながら、我がまちは山や海、川といった自然に恵まれているが故に、時には深刻な自然災害に見舞われるおそれも否定できない。2014年におきた広島土砂災害のように、いつどういった災害が起きるとも限らない。広島土砂災害では「まさか自分たちが」と、インタビューに答えていた被災者の方たちがいたことを忘れてはならない。

呉市民も防災対策が足りていないと感じていると統計が出ており、呉市としても災害に関しての情報をホームページ等で提供している。しかし、どれだけの人が関心をもって見ているのだろうか。予期せぬことが起きてしまったときの対応、対処の遅れは、致命的な結果になることもある。災害が起こってから慌てても遅いのである。広島土砂災害では、私も微力ながらボランティアで現地に赴いたが、想像を絶する悲惨さであった。こうした状況の中で、自分や他人の生命、生活を守り、被害の拡大を防ぐためには、とっさに判断し動くための知識と方法を知っておかなければならない。

呉の地には、消防だけでなく海上自衛隊や海上保安庁といった災害等に対しての知識をもったスペシャリストがいる。身近にある力に頼らない手はない。こうした人たちからの知識や情報を活用し、それぞれが関心をもち、より安心して住めるまちづくりを目ざしていかなければならないと考える。

### **b o n d s** ～仲間の絆を深め、輪を広げていく

我々が活動していく上で必要なのは、個々の責任感・使命感だけでなく、メンバー間の強固な繋がりである。私も、自分の責任感・使命感をもつ中で、この人のために、この人だからという思いで突き動かされ活動してきた面が多くある。活動の中で辛いなど思うこともあるが、最後は人との繋がりがモチベーションになるのでないだろうか。その繋がりは、

例会や委員会などで切磋琢磨し合うこと、楽しい時間を共有することでうまれる。会議の中で意見を出し合い、時にはケンカもあるだろうが、遊びの中でコミュニケーションをとる。この繰り返しが重要なのだと考える。最近、入会しても途中で退会していく人も多い。諸事情はもちろんあるだろうが、何が問題なのだろうかと考えることがある。それもやはり、メンバー間の楽しい交流が少し不足しているからなのではないだろうか。辛いわかりでは、人は続かない。その中に楽しいと思える経験があるから次も頑張れるのである。

また、まちのことを考え活動している団体は、呉のまちにも多くある。そういった団体と我々の情報やネットワークが一緒になれば、より大きな力が発揮されるはずである。同じ方向を向いているもの同士、力を合わせない手はない。もっとお互いを知り、事業や例会での交流を通して連携を深めていきながら、まちのための活動に活かしていきたいと思っている。

### **i n c r e a s e** ～多くの同志を求めて

私が入会した2010年度、呉青年会議所は80名を超えるメンバーで構成されていた。とにかく、メンバーの数とエネルギーに圧倒されたのを覚えている。しかし、6年の間に30名以上もメンバーが減り、現在の呉青年会議所は50名ほど。「マンパワー」という言葉を我々はよく使うが、その言葉の意味をより痛切に感じるようになってきた。まちだけでなく我々青年会議所も、すべては人から始まる。仲間が増えることに比例し、団体としての力も向上することは間違いないのである。

私は、呉青年会議所が好きだ。まちのために頭を悩ませ行動し、友情を育み、自身の成長へと繋げる。この歳にして、まさに第2の青春を経験させてもらっていると感謝している。だからこそメンバーの減少は、率直にとてもさみしくも思うのだ。

より良いまちづくりのために1人でも多くの仲間が増え、活動を通してこの団体を好きになってもらいたいと思う。そして、更にそのエネルギーを呉のまちのために注いでいきたい。

私は呉のまちが好きだ。

だから、呉のまちのためにできることは何であるかを考える。

一人の力だけでは、できることはたかが知れている。だからこそ呉青年会議所メンバーの力を借りなければならないのだ。そして、市民を巻き込み、一緒にどのまちよりも魅力的なまちにしていきたいと思う。